

スポーツファシリティマネジメントの理論的検討： 情報経営研究における社会物質性論を手掛かりとして

○宇野博武（高松大学）

スポーツファシリティ、ファシリティマネジメント、プロスポーツ、社会物質性、技術決定論

1. 研究の背景

今日、いわゆる「スポーツの成長産業化」政策の一つとして「スタジアム・アリーナ改革」が進められている。ここでは、2025年までに20箇所の新たなスタジアム・アリーナを実現することが目標に掲げられており（日本経済再生本部, 2020）、スポーツ庁（online）によれば、実際に現在、全国で95件のスタジアム・アリーナ新設/立替構想の動きがあるという。そして、この改革では「観るスポーツのためのスタジアム・アリーナ」が基本指針となっていることから、今後はプロスポーツクラブ・球団がこれらスタジアム・アリーナの管理運営主体として期待されていることを窺える。また、スタジアム・アリーナのような「スポーツファシリティ」（以下「SF」と略す）はスポーツ行動を支える重要な経営的条件の一つであり、効果的なプロスポーツ組織によるスタジアム・アリーナの管理運営、すなわち「スポーツファシリティマネジメント」（以下では「SFM」と略す）に関する知見を蓄積することは、スポーツ経営学における肝要の研究課題と考えられる。

さて、このSFとは、スポーツ経営学において、人々とスポーツとの関わりを成立させる物理的・地理的な空間であり、固定された「設備」のみならず、固定されていない「用具」に加え、「付属設備」や「付帯施設」を包含するものと捉えられてきた（藤井, 2017）。そして、SFMについては、企業経営領域のファシリティ（オフィスなど）マネジメントについて論じるベッカー（1992）の概念規定に倣えば、「スポーツ組織の有効性を高めるためのSFの計画や設計あるいは運営業務を調整する機能」と捉えられるだろう。

翻って、スポーツ社会科学領域ではこれまでもSFあるいはSFMに関する研究が重ねられてきたが、そこでは、「Jリーグクラブが専用スタジアムを持つだけで高い試合臨場感の観戦経験をファンに提供することができる、とシンプルに表現することもできよう」（藤本, 2017）と指摘されることがある。このようにSFの物質的特性とSFM成果との単線的な関係を想定する主張は、SFのような人工物ないし技術をめぐる社会科学的研究において「技術決定論」と呼ばれる仮定に立脚するものと考えられる。ところが、この技術決定論については、松嶋（2015）によれば、「客観的な技術機能を有していたと仮定しても、それが実際の社会や組織におい

て一定の目的で利用されるとは限らない」（p.69）ため理論的に問題を孕んでいるという。確かに、Parrish（2013）では、サッカー専用スタジアムを新設しながらも、目新しさの減退などにより長期的には当初の目論見通りの成果が得られなかったMLSクラブ（コロンバス・ブルー）の事例が報告されていることから、SFMに関する技術決定論的な理解は見直されるべきと指摘できるだろう。しかし管見の限り、こうしたSFあるいはSFMをめぐる技術決定論の問題については、先行研究において十分に検討されているとは言い難い。

そこで本研究では、この技術決定論を克服する最新の知見である情報経営研究における社会物質性論の理論的背景および記述的意義を整理し、SFM研究の可能性と今後の課題について検討することを目的とする。

2. 社会物質性の理論的背景

はじめに、「社会物質性 (sociomateriality)」とは、組織における情報技術実践を捉えるため、その「文字通り、社会的で物質的な性質に着目していこうという考え方」（古賀, 2017）と言われる。ここでは、例えば、「タイプライターの利用」という情報技術実践は、「会報をメンバーに配布する」という組織ルーティンと「文書作成機能」という技術内容とが混合した事象として、そして、ゴールを形成し実現する人間の能力である「人間エージェンシー」と人間の継続的な介入なしで行為をする能力である「物質エージェンシー」とが、（まるで瓦屋根が牡瓦と牝瓦というそれぞれ固有の特性を持ったものの「うろこ状の重なり」によって機能するよ

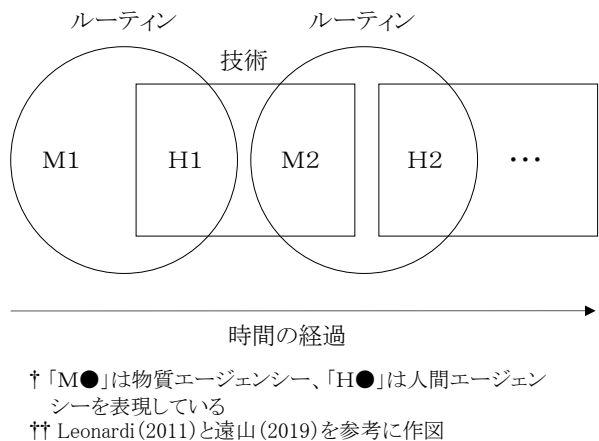


図1 ルーティンと技術のインブリケーション

うに) 時間的に折り重なり創発する/していくものと、図1のように捉えられる(Leonardi, 2011; 遠山, 2019)。

そして、この社会物質性が提起された背景には、技術決定論の克服を目指した「技術の社会的構成(social construction of technology: SCOT)」から「技術の構造化モデル(structurational model of technology)」へ、そしてさらに「構成的もつれ」(constitutively entanglement)をメタファーとするもう一つの社会物質性の提起、という情報経営研究における重厚な理論展開を看取できる。この理論展開とは、松嶋(2015)や遠山(2019)および筈井・吉野(2019)の説明を要約すれば次のようなものである。すなわち、SCOTは分析の対象を人々(関連社会グループ)の「解釈」へ移行することで技術決定論の回避に成功したものの、肝心の情報技術そのものの特性を捉えられなくなってしまった。この理論的な限界を受け、技術の構造化モデルは、情報技術の「実践」に照射し、技術と組織(あるいは社会)の相互作用による情報技術の創発過程を概念化した。技術と社会という二分法を所与とする限り、技術決定論を潜伏させており、それから逃れることはできなかった。そのため、技術と社会という二文法を捨て、両者は存在論上もつれあっていると

「関係的存在論(relational ontology)」にコミットすることとなる。ところが、あらゆるものに「もつれ」を仮定してしまうと、その「もつれ」を構成する物質や人間のエージェンシー(作用する力)を理解することが論理的に不可能となってしまったというのである。

このような理論的背景に鑑みれば、「うろこ状の重なり」をメタファーとする社会物質性の理論的意義が鮮明となろう。すなわち、この社会物質性では、「社会と物質を同等に扱い、両者が互いに因果的に関係することによって技術が機能するメカニズムを明らかにしようとする分析的二元論の立場」(筈井・吉野, 2019, p. 44)に立脚し、情報技術を改めて分析可能とするのである。

3. 社会物質性の記述的意義

では、うろこ状の重なりをメタファーとする社会物質性は、どのような現象記述を可能とするのだろうか。国内では、高校運動部活動における組織ルーティンがこの視座から分析されている。具体的には、筈井・吉野(2019)は、6つの運動部を対象としたフィールドワークにより、練習用具の種類や量、監督の指示と指導のパターン、監督不在時のトレーニングの遂行性を把握し、比較分析を行っている。結果として、監督不在時のトレーニングの遂行性、すなわち組織ルーティンの遂行性は、練習用具の量およびそれら用具に関する指導の有無により左右されることが観察され、組織ルーティンとは「先在する物的構造と組織的内化メカ

ニズムによって生成される組織の社会物質的な特性」であることが示唆されている。

さらに、筈井(2020)では、物質性(物質エージェンシー)が理論的に精緻化され、組織ルーティンが情報技術の「自存的物質性」(人間の認識から独立した物質的特性)と「意存的物質性」(人間の認識にその存在様態を依存している物質性)、および組織成員の主体性との時間的な折り重なりにより創発する、その具体的な記述モデルが経験的な研究から示されている。

4. まとめにかえて

さて、社会物質性の視座に基づくならば、SFMとは、SFの物質エージェンシーと管理者や利用者の人間エージェンシーが時間的に折り重なり創発していく社会物質的な実践と捉え直すことができよう。このSFMの見方は、情報経営研究が直面してきた理論的課題——言わば意図せざるファシリティ利用(技術決定論)、人々の解釈への還元(SCOT)、もつれを解くことのできない存在論へのコミット(技術の構造化モデル、構成的もつれをメタファーとする社会物質性)など——を回避するものと言えるかもしれない。現に、技術決定論的な藤本(2017)のみならず、スポーツ社会科学領域における公園研究(山崎, 2013)では、すでにSF利用様態の創発的な性格が指摘されている——「実践のせめぎ合い」(あるいはその歴史性)によるSF利用の規定。社会物質性の視座には、これらの理論的限界を克服し、デザイン志向による経営知識産出の糸口となる可能性も指摘できる(筈井・吉野, 2019, p. 49)。

もっとも、本研究は情報経営研究の知見を整理するに留まり、具体的なSFM事象の分析に未だ耐え得るものではない。改めて考えると、体育館床の振動特性を分析した山崎(1969)などは、SFの物質エージェンシーを捉える貴重な研究だったと捉えられる。また、海外では、スポーツオブジェクトの物質性を物語論の立場から分析しようとする議論もみられる(Smith and Humphries, 2017)。今後の研究課題としては、SFの物質エージェンシーを分析の俎上にあげる具体的手法の検討とともに、社会物質性のさらなる理論的検討ならびに経験的研究の実施をあげられるだろう。

【主要文献】

- 松嶋登(2015) 現場の情報化: IT利用実践の組織論的研究. 有斐閣.
- 遠山曉(2019) 情報経営研究における社会物質的パースペクティブの可能性. 日本情報経営学会誌 39(3): 5-27.
- 筈井俊輔・吉野直人(2019) 組織ルーティン研究における社会物質性の視座: スポーツ・トレーニング組織の比較分析. 日本情報経営学会誌 39(3): 40-51.